

# ニュージーランドの英語教育

——初等教育を中心に——

津 島 克 子

## 1. はじめに

ニュージーランドの国語は英語である。したがって表題の「英語教育」は「国語教育」と同値である。日本における「英語教育」は「外国語教育」である。言語の習得過程において、母国語と外国語では種々の相違点が見られる。しかしどちらの場合も、学習者は始めから完全な目標言語を簡単に習得するのではなく、種々の間違いを繰り返しながら相当な時間をかけて習得が行われ、相互にある程度の共通点の見られることも確かである。加えて学校教育の観点から考えると、英語を母国語とする国の国語教育、特に初等教育段階での国語教育には、日本の英語教育の参考となる共通点もより多く存在するものと考えられる。本論ではニュージーランドの初等国語教育の教材を中心に日本の英語教育の参考となる点を考察する。

## 2. 世界の中のニュージーランドの国語教育

ニュージーランドの学校教育には、私のウエリントンを中心とする研修期間中（1988-1989）に接する機会が多くあり、注目をしてしたが、その国語教育は世界の中でも相当の評価を得ているようである。ちなみに『ニューズウィーク』の「世界の教育ベスト10」という特集に、国語教育ではニュージーランドが最もすぐれているとして紹介されている。日本の教育は、科学教育が実用的であると評価され、ベスト10に挙げら

れている。予想に反して、数学教育では日本ではなくオランダが、具体性を重視した新方式が評価されて、ベスト10に入っている。残念なことに、日本の外国語教育は世界でも評価されていないようである。

### 3. 初等国語教育

上記の『ニューズウィーク』の特集によると、ニュージーランドの国語教育は「自然流」で「読み書きは終わりになき道」を特徴としている。つまり、小学校低学年の全授業時間のうち50%が読書と作文に当てられているのである。これが、この国の国語教育の高水準の最大要因であるとされている。その他の要因として、機械的暗記よりも理解力の育成の重視、個人の学習能力や速度に応じた教育、年齢別クラス分けではなく能力別クラス分け、優れた教材の選定などが挙げられている。これらの点は日本の英語教育の改善にも参考になろう。

学校の時間割は、とても大まかに組まれている。9時から始まり、休憩時間は午前中に1回、そして1時間の昼休みの後は3時まで授業が続けられる。その間の配分は、担当教師が進み具合を見ながら決めていく。ニューズウィークでも言っている様に、読書や作文、スペリングなどの国語教育にあてられる時間は非常に多く、それも低学年程増している。特に5、6歳児のクラスは、初めての学校教育により、それまでの音声言語から文字言語へと移る時期の為、特に読みの時間が多くなる。読みの時間と言っても、日本の学校の様に、全員が同じ教科書をいっしょに読むというのではない。それは、まず統一された国語の教科書というものが無い。又、ニュージーランドでは、5歳の誕生日の次の日から、いつでも学校に入学する事ができる為、そのクラスで一年近く勉強した子もいれば、昨日から始めたという子もいる。その為自然と、能力別というか、その子の能力に合わせた教材が選ばれる。始めは、絵や写真が多い単語の本から入り、次に短いセンテンスに入り、物語へと移っていく。

読めない単語や、わからない意味は先生や、友達に聞きながら進んでいく。そして一冊の本が終わると、先生の所に行き読んでチェックしてもらい、次の段階の本へ進む許可をもらう。

読書をする時の姿勢も、必ずしもイスに座っている必要はない。教室の隅に置かれたソファに座る子、横になって読む子と自由である。とにかく、まず、本に触れることの楽しさを教えていく。

アメリカの小学校では、低学年で発音練習、アルファベット26文字の持つ音と綴り字を関連させる Phonics Method が行なわれているが、ニュージーランドではほとんど行なわれていない。耳と口で憶えていた単語を文字に置き換えることなので、簡単な単語から繰り返し読んだり、書いたりしていれば、自然に憶えていくという。

ある程度進んで行くと、読みから作文をする時間が増えていく。始めのうちは絵を書きその下に2～3行のセンテンスを書いていくが、多少の間違いは問題にしない。ここでも文を書く楽しさを教えることが目的とされる。中には、Mam gave me a kuuki. San kyou mam. というようなかわいい間違いがある。

#### 4. 高学年の国語教育

高学年になると、自分で物語を書き、クラスで発表する機会が多くなる。何故か日本の小学校によくある感想文を書く活動は見られない。

高学年の Language というクラスで、Extention 又は Word Building と呼ばれる活動がある。これは教師が黒板に、at →, but →, to →, for → と板書して、それを受けて生徒は次の様に自分の知っている語を書き加えていく活動である。

at → ate, attend, attending

but → butter, butterfly, butterflies

to → toast, toaster, toasters

for → form, formal, formally

この活動は、子供の競争心を誘うようにゲーム形式にし、グループ対抗で競わせて、生徒が楽しく授業に参加できるように行なわれている。日本でも既習語の復習や定着をはかる活動として利用できよう。

各教科が関連されているのも興味深い。これはアメリカの学校でも行なわれている Project 方式の授業である。ひとつのタイトル例えば、“Sport” “Food” “Education” などを決める。そのタイトルに従って各教科で各方面から繰り返す行うので、自然と広い理解力が着いていく。

一概には言えないが、日本の詰め込み教育ではなく、個人の能力、速度に見合った余裕のある、そして楽しい教育はすばらしいと思う。

## 5. Reading 教材

Language, Reading, Writing, の他に Library という時間が週 2～3 回入っている。日本の学校と同じ様に図書館に行き好きな本を読む。

図書は日本の学校と大きな違いはないが、日本のどこの小学校にもある、偉人の伝記はほとんどない。それに変わって多く見られるのが動物・植物・世界の写真集など生活に密着したものがある。小説も各国のものがあるが、やはりニュージーランドの作家に人気があり、書棚の広い場所をしめている。

低学年の Reading の授業で使われている本はいろいろあるが、中でも“The Story Box”というシリーズの人気が高い。次の 3 点は入門期用の例である。

- ① Get-ready books (Set A. B. C 計 24 冊)
- ② Ready-set-go- books (Set A. B. C. D 計 32 冊)
- ③ Level One Emergent Books (Large Books, More Large Books, Small Books 各 8 冊)

①と②は10ページ程度の絵が多く、ほとんど単語だけの繰り返しになっている。名詞と動詞だけの繰り返しで次のページの予想がつくが最後のページまでつい引きづりこまれてしまう。例えば①の中の例をあげてみる。

In the mirror//See my fingers,/ See my elbow,/ See my toes,/ See my knee,/ See my tongue,/ See my nose,/ See a monster,/ That's me.

これがかわいい絵の下に一行づつ書かれている。どの単語も音ではよく知っているし、絵を見れば fingers なのか Toe なのかすぐわかる。

**A monster sandwich.**

Put some lettuce on it.

Put some cheese on it.

Put some pickle on it.

Put some meat on it.

Put some tomato on it.

Put some bread on it.

Now take a bite. Yum, yum!

この2つを見てもわかるように、簡単なそして日常の生活に結びついた単語の繰り返しなのでとても憶えやすい。

この程度の教材なら、日本の中学生の副読本として十分使えるものと思う。絵が多いことで多少幼稚に思うかも知れないが、例えば elbow = 「ひじ」として概念的に結びつけるよりも、絵を使って視覚に訴えるほうが頭に入りやすいのではないだろうか。又、繰り返しによって語彙の順序も、説明による理屈でなく自然に憶えていけることと思う。

③の程度になるとページ数も増し、絵も少なく、センテンスも長くなってくる。それでも同じ文の繰り返しが多い為憶えやすい。又どの Story も生活に密着しているので、その国の文化を知るにも役立つであろう。

## 6. 結語

外国語の習得は母国語習得のような自然な環境ではなく、母国語という強い言語が身に着いた後に追加されていくものなので簡単ではない。又、スタートする時期も母国語のように幼児期でない為に、知性というものがついているので単純には行かないのである。が少しでも母国語習得に近い方法で行なうことは無理だろうか。言語は母国語社会の中で、その国の文化と共に育ち習得されていくものである。国際社会の日本では、ますます英語は必要不可欠なものとなっていく。昔に比べると、日本と英・米とのいわゆる文化の差は少ないと思う。それだけ英語を勉強するのに恵まれた環境の中にいるのである。言語はあくまでも、コミュニケーションの手段。そこで大学の受験英語のような難しいものでなく、もっと生活・文化に密着した英語を身につける学習方法はできないだろうか。

読み書きは全ての学問の基礎になる。(英語の)本を読むことによって、単語も増え、理屈なしで文法も身に着き、英米の文化をも知ることができる。英語学習の初期のうちにこれらの活動をより多く生徒に与えてほしい。高度な英語でなくても、基礎さえ確実なものなら、それをふくらませて行くことは難しいことではない。

## 参考文献

- 『講座新しい英語教育 1. 新英語教育論』大修館書店, 1976年。  
 『外国語習得のスキル—その教え方』(ウィルガ・M・リヴァーズ著 天満美智子/田近裕子訳) 研究社, 1987年。  
*National Education, Journal of the New Zealand Educational Institute*, 1988年。  
 『ニューズウィーク日本版』(12月5日号) TBS ブリタニカ, 1991年。